伝統芸は知るものではなく、身につけるもの。

岩下尚史

vol.46　AGI第一世代の、育て方、育ち方。

年を重ねると、むかしの辛かった事を忘れると云うのは本当で、そのひとつに、むかしは今ほど暑くなかったと云う、御年寄の愚痴を聞くことが多いことでも分かる。

地球温暖化と云う説が正しいか、そうではないかなど、神様でも仏様でもない私の知る由もないが、今の八十代から九十代の人たちが幼い頃には空調設備どころか、農村部には扇風機もなかった昭和前期に於いて、昼も夜も高温多湿に蒸せ返る中、蚊帳を吊って団扇を遣うほかはなかった夏の暮らしが、今より過ごし易かったとは思えず、今のように頻繁に報道こそされないが、日中毒すなわち熱中症で命を殞す人も少なくはなかったと想像する。

現在六十五の私にしてからが、我が家にクーラーが設備されたのが小学校四年生の時で、それまでの夏場と云ったら、思い出しても眼が眩みそうな爍金の暑であって、学校から帰る途では焦げつくような日差しを襟元に感じ、足許からは土も裂くる炎熱に照らされて、呼吸も苦しいほどであった。

喉の渇きに堪えて家に辿り着き、重いだけで面白くもない教科書を容れたランドセルを抛り投げ、扇風機を足で引き寄せ寝転がると、畳を通して床下の温気が吹き上げたのを思い出す。

ですがね、むかしは今ほど気温が高くはありませんでしたよと仰言る御老人の声が聞こえそうだが、東京の高台の屋敷町で暮らした内田百閒と云う文士の、昭和十何年かの日記によれば、屋内の温度計が三十六、七度を越えて汗が止まらず、一睡も出来なかったとある。

湿度に弱く、脱水気味になりがちの私にとって、クーラーほど有り難いものは一寸ほかに思い付かないーと、書きかけて気が付いた事がある。

クーラーどころか、この三年ばかり前から、生成AIの奇蹟的な大事業が速度を増して向新めざましく、アメリカ西海岸の賢者たちの言によれば、AGIつまり汎用人工知能の実現は目前であるらしい。

その科学文明の恩沢を逸早く受けたと見える富有人の中には、子弟を高校に上がらぬうちからアメリカの、その界隈では著名な学校へ入れる親もあると云うので、その中の幾人かに、AIの本場所に於ける最新のエリート教育の実態を訊ねたところ、「お互いの好いところを認め合うように、和気藹々と遊ばせるようですよ」と答えるのを聴いた私は、「教育といふものは言語文學算數等の知識を授けるのみではない、人の心の發達開展を正しく美しい方向へ傾向づけること」と云う、むかしむかしの幸田露伴の文章を思い出した。

なるほど、生成AIが言語を理解し、論理的に思考して、未知なる課題を自律的に習得しすると云うAGIが実現し、それどころか数年後にはASIすなわち人工超知能の時代が到来するとしたら、これまで常識とされた偏差値の目盛りを睨んで暗記に励む点取秀才の価値は下落して一否、すでに十数年前から学歴だけでは好い目の見られぬ世の中になっていることは、すでに皆様も御存知の道理。これからの時代で物を云うのは人柄と、体力であるらしい。

その関連で云えば、私が拙陋なりの文章を作るとき、その土台となっているものは読書や作文の量ではなく、幼い頃に熱中した粘土あそびで培われたと、今にして思うのである。

四十七年前に実施された共通一次試験の、その第一世代の劣等生であった私は、早く生まれ過ぎたと悔やまれてならない。

TV・ラジオでコメンテーターとしても活躍。
作家・岩下尚史氏のコラムが好評連載中。

岩下尚史（いわしたひさふみ）…作家。國學院大學客員教授。新橋演舞場（株）退社後、芸者の発生と変遷について著した『芸者論』にて、新人としては異例の第二十回和辻哲郎文化賞を受賞し、本格的な作家活動を開始。その他、三島由紀夫の恋人への取材を基に書き下ろした『見出された恋』、『ヒタメン』などの著作がある。また、日本の伝承芸能や古典的な暮らしについてのエッセイ等も多数著している。現在、季刊「美しいキモノ」（ハースト婦人画報社）にてエッセイを連載中。また、現在、新刊発表に向け、鋭意執筆中。

はじめての文楽に、驚きを

「摂州合邦辻」

「桂川連理柵」

写真：青木信二

グランシップ伝統芸能シリーズ 人形浄瑠璃 文楽

人形の喜怒哀楽に胸を打たれる 三業が織りなす生の舞台

太夫、三味線、人形遣いの三業が一体となり、一つの世界を創り上げる「人形浄瑠璃 文楽」。世界に類を見ない日本独自の舞台芸術であり、ユネスコ無形文化遺産にも認定されています。グランシップでは毎年文楽の公演を開催しており、静岡の地で世界に誇る伝統芸能に触れる機会を継続してお届けしています。

はじめて文楽を鑑賞した方からは「人形が意思を持って動いているよう」「生きているとしか思えない」といった驚きの声をいただきます。人形遣いによって、人間さながらに動き出す人形たち。そこで表現されるのは、出会いや別れ、大切な人を思いやる心、そして、すれ違いや苦しみといった人間の心の機微です。古典の世界でありながら、人形が織りなす繊細な所作は、現代に生きる私たちの心にも不思議と重なり、時を超えて大切なものを語りかけてくれます。

また、文楽には「音」の要素も欠かせません。物語の展開や台詞を巧みな抑揚で語る太夫の声、そして情景や心情を鮮烈に描き出す三味線の音色。三業の息の合った技が重なることで物語に奥行きが生まれ、観客を深い感動の世界へと惹き込みます。

今回は、登場人物の感情の揺れ動きが胸を打つ、味わい深い演目が揃いました。昼の部は、義理の息子に道ならぬ恋をする継母の激情と哀しみが心に迫る「摂州合邦辻」と、牛若丸と弁慶が主従の契りを結ぶ「五条橋」。夕の部は、年齢差のある男女と二人を取り巻く人々の思いが交錯する「桂川連理柵」を上演します。字幕表示や開演前のあらすじ解説があり、初めての方も物語を理解することができます。

江戸時代より数多の名人によって磨き抜かれ、現代へと継承されてきた伝統芸能の魅力を、ぜひグランシップでお楽しみください。

人形浄瑠璃 文楽

10/11（日） 昼の部13:00～/夕の部17:00～ ■中ホール・大地

■1階席4,200円、2階席2,000円、こども・学生1,000円（28歳以下の学生）、昼夕通し券7,560円 ※未就学児入場不可
※2階席は舞台を上から見下ろすため、人形や舞台の一部が見えにくい場合があります。

【演目】〈昼の部〉「摂州合邦辻（せっしゅうがっぽうがつじ）」～合邦住家（がっぽうすみか）の段、「五条橋（ごじょうばし）」
〈夕の部〉「桂川連理柵（かつらがわれんりのしがらみ）」～六角堂（ろっかくどう）の段～帯屋（おびや）の段～道行朧の桂川（みちゆきおぼろかつらがわ）

最新情報はこちらから

夕の部ご来場の方限定 **富士市出身 文楽人形遣い・桐竹勘次郎さんによるミニレクチャー**

■16:00～16:20 ■中ホール・大地 2階ホワイエ
文楽人形の仕組みや動かし方などの解説を間近で見られる貴重な機会。夕の部のチケットをお持ちの方はどなたでもご参加いただけます。